

子どもの危険な行為 24 場面に対する大学生の ヒヤリハット認知の学年差

大野木 裕明・伊東 知之・石川 昭義

仁愛大学人間生活学部

The difference between university students by grade/year of education in their near-miss incident identification and recognition of 24 scenes of children engaging in risky behaviors

Hiroaki OHNOGI, Tomoyuki ITO and Akiyoshi ISHIKAWA

Faculty of Human Life, Jin-ai University

幼児教育を専攻する大学生と保育所・幼稚園勤務の現職保育者に対して、子どもの事故発生に関わる危険感受性の程度に関する調査研究を行った。大学生1～4年生167名と現職者95名に対して、「子どもの危険な行為 24 場面」(伊東ほか 2012 年版)を提示し、保育者として危険場面にヒヤリハットする主観的確率の程度の判断を求めた(ヒヤリハット認知得点)。主な結果は以下のようであった。(1) 場面ごとにみると、24 場面中の 15 場面において、大学生のヒヤリハット認知得点の学年差が見出された。しかし、学年の上昇に伴う得点の増減傾向は複雑なパターンを示した。(2) 24 場面全体の得点では、大学生群の方が現職者群よりもヒヤリハット認知得点が高かった。(3) 大学生と現職者の合併データからは、24 場面全体のヒヤリハット認知得点と保育経験年数との間に有意な負の相関がみられた。すなわち、経験年数の上昇と共にヒヤリハット認知得点が下降した。(4) ただし、大学生4 学年群についてみると、学年要因とヒヤリハット認知得点の間には有意な相関関係は見られなかった。

キーワード：ヒヤリハット認知、保育経験年数、保育士、幼稚園教諭

保育所や幼稚園では、園内での子どもの身体的な事故を防止するいろいろな対策を行っている。その1つは事故発生の人的要因に関する予防策である。例えば、過去の重大事故の典型事例(田中2007; 田中・石井2003)を教職員の間で掌握・共有することによって教職員の安全意識を高めている。あわせて、子どもたち自身に対しては、危険行為の禁止を具体的に働きかけている。

このほか、危険な場面に遭遇したいわゆる<ヒヤリハット>体験を共有化して、それを職場の危険予知訓練(KYT)の教材として使う(田中2006)。ヒヤリハット体験とは、「結果として重大事故に至らず未然に気づいて回避した場面の体験、あるいは事故の程度

が軽度にとどまったが重大事故の可能性もあった場面の体験」(石川ら2009)である。ヒヤリハット体験もまた、もしかしたら大きな事故に結びついたかもしれない場面・行為であるから(Heinrich, et al. 1980), これも重大事故の典型事例と同様にして事故防止策に反映されている。

ヒヤリハット体験の共有化が効果的であるとする根拠は何か。事故場面の知識を共有化することは安全意識の高揚に効果的である。しかしながら、ややもすると、その効果は短期的にしか持続しない。一方、ヒヤリハット体験は驚いたり恐怖感を抱いたりする感情を伴うので、その効果が長期間にわたって持続する可能性がある。

危険(リスク)は、被害がどれぐらい大きく重いかと、それがどの程度の確率で発生するかという2つの要素の積であらわされる(National Research Council, 1989 [吉川2000より])。これに対してヒヤリハット場面におけるリスク認知の性質は少し主観的な面を強調する。その事故がどの程度の確率で起こるか、あるいは結果がどのぐらい重大なのかについての個人的な見立て・評価が大きい。したがって、「この場面が発生するとその直後にはこうなる」といった時系列的な部分の知識や、自分が的確に回避的な対処行動がとれるか否かという自己効力・自己評価が大きく影響する可能性がある(大野木ら2011)。同じ危険場面に遭遇したとしても、ある保育者はヒヤリハットするが、他の保育者はヒヤリハットしないことは、このためとも考えられよう。

我々は将来の保育者(保育士、幼稚園教諭)を大学教育において養成する立場から、ヒヤリハット場面に関する3つの調査的研究を実施してきた(石川ほか2009, 大野木ほか2011, 伊東ほか2012)。そして、在学生や現職者の協力を得ながら、子どもに関するヒヤリハット認知24場面の図版を試作し、それを使った危険感受性を育成する教材開発研究を目指している(2012年版の作成)。この図版の作成に当たっては、事故の事前場面と事後場面对比的に提示させて、具体的にヒヤリハット認知の感情面と知識面に訴えるという考え方をとった。

本研究の目的は、2012年版によるヒヤリハット認知得点が、保育士や幼稚園教諭の養成系大学4年間にあってどのように推移するかを調査研究することにある。

また、その程度が、大学生段階では現職者と比べてどの程度のものであるかを把握することにある。具体的には、大きくは以下の2つについて調べようとする。

目的1: 2012年版によるヒヤリハット認知得点が、大学4年間の学年進行に伴ってどのように推移するかを横断的調査法によって把握する。

目的2: 2012年版によるヒヤリハット認知得点が、大学生と現職者(保育士・幼稚園教諭)の間で、どの程度の違いがあるのかを比較検討する。

方法

手続 前報(伊東ほか2012)と同様の方法によった。24場面それぞれについて、ヒヤリハット場面と事後の場面の2枚で1セットの図版(図1)をプロジェクターで提示し、調査協力者の手元の回答用紙に記入を求めた。調査は集団形式で行い、所要時間は約20分であった。教示は次の通りであった。

質問1: ヒヤリハット認知の主観的確率(以後、「ヒヤリハット認知得点」と略称する): 「事故前のQ図を見かけたとします。あってはならないことですが、もしも回避もせず、注意もしなければ、次のA図のような結末になるのは、10回のうちで何回ぐらいだと思いますか。」

質問2: 該当年齢: 「このヒヤリハット場面は、何歳に一番多いと思いますか。(絵の人物そのものの年齢ではなく、場面を手がかりにして考えて下さい。)」

調査対象と時期 現職の保育者(幼稚園教諭・保育士)向けの講習会「教育現場の質をより高めるために」(2013年8月)に参加した受講者95名の回答を分

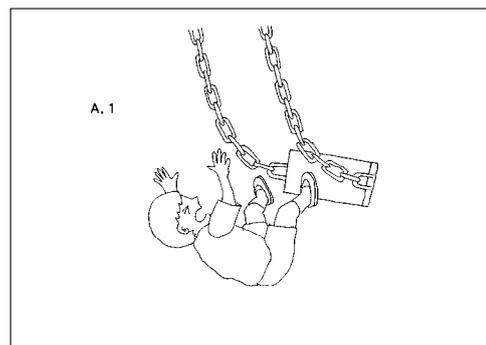


図1 子どもの危険場面の事前と事後の一例 (伊東ほか2012)

析の対象とした。

大学生については幼稚園教諭・保育士志望の課程に在籍するA大学学生を対象とし、2013年6月から7月にかけてその学年が受講する授業クラスにおいて実施した。回答の得られた1年生50名、2年生41名、3年生36名、4年生40名の合計167名を分析の対象とした。

研究上の倫理的配慮 大学生と現職者のいずれにも、実習事前指導や勤務中の事故防止に関する教材開発研究であるという調査協力依頼の意図を説明して、了解の得られた回答を分析の対象とした。無記名による回答とした。

結果と考察

1. ヒヤリハット認知得点に関する大学生の学年差

(目的1)

1-1. 概観

質問はリスク現象に対する主観的な確率として10回のうちで何回遭遇するかの見込みを尋ねている。得点は1回が1点として数値化し個人ごとに10点満点で得点化した。そして、学年ごとの平均値とSD(標準偏差)を表1に示した。なお、数値は10倍すると100パーセントに換算される。各場面に対するヒヤリハット認知の得点傾向を把握することが目的であるので、まずは場面ごとに1要因4水準(学年:1年生, 2年生, 3年生, 4年生)の分散分析を行った。場面1, 場面4, 場面5, 場面6, 場面7, 場面9, 場面11, 場面12, 場面13, 場面14, 場面15, 場面20, 場面22, 場面23, 場面24の15場面に関する得点が統計的に有意となった。そこで、24場面を内容的に自損事故、子どもと子どもの事故、おとなと子どもの事故の対人的な3タイプに区分してみると、自損場面は12場面のうち7場面が有意、子ども-子ども場面は8場面のうち5場面が有意、おとな-子ども場面は4場面のうち3場面が有意であった。つまりは、対人的な接触のこれら3タイプと学年差の有無とが関連するという傾向はうかがえなかった。

一方、学年差の見られなかった場面を概観して考察したところ、高い得点の場面だけ、あるいは低い得点

の場面だけ学年差が見られないという特徴的な傾向も見受けられなかった。

分散分析で有意性の認められたヒヤリハット場面について、さらにどの学年間に差があるのかをみるためにチューキー(Tukey)のHSD法を用いて群差を調べた結果を表2に示した。

概観すると、以下の傾向が見られた。第1に、2年生と4年生が低く、1年生と3年生が高い項目場面が見られた。第2に、必ずしも、学年と共に単調増加あるいは単調減少するわけではなかった。以上の傾向に関しての解釈はいくつか考えられる。1つには学年進行に伴っていったん下降した後で上昇する傾向なのかもしれない。学年が進み実習経験が多くなるとリスク認知が過剰になってしまい、その結果ヒヤリハット認知の得点が高くなるのかもしれない。逆のことも考えられる。経験を積んで危険を回避する対処行動上の自信が生まれてくると、ヒヤリハット認知得点が低くなるのかもしれない。いずれにせよ、この調査だけでは理由は明らかではない。もう1つの可能性は、学年特有のコホートの反映なのかもしれない。この解釈についても妥当であるかは、今後の追跡的な調査研究に待たなければならない。

1-2. 24場面の合計得点による学年差

24場面に関して因子分析を行ったが因子解釈が容易ではなかったため、24項目全体の合計得点の平均値を算出した。クロンバックの α 係数は.910と十分に高く、その項目を削除した場合の α 係数も.903から.911と高かったため信頼性は確保されているとみなした。学年要因の分散分析の結果は $F = 6.27$ ($df = 3/162$, $p < .01$)となり有意であった。チューキーのHSD法(5%水準)によると2年生(3.72)よりも1年生(4.51)、4年生(3.80)よりも1年生(4.51)、2年生(3.72)よりも3年生(4.72)、4年生(3.80)よりも3年生(4.72)の平均値が有意に高かった。

1-3. ヒヤリハット場面の多発年齢

質問2では、子どものどの年齢にヒヤリハット認知が多く見られるかという経験を尋ねた。その結果を表3に示した。場面1を例にして表3の表記を説明す

表1 ヒヤリハット認知得点の学年別の平均値 (SD)

ヒヤリハット場面	1年	2年	3年	4年	F値
場面1 : ブランコから転落	5.48 (2.71)	3.98 (1.99)	7.34 (2.70)	6.70 (2.38)	F = 14.07 **
場面2 : 友だちの乗ったブランコに激突	4.98 (2.62)	3.85 (1.74)	5.06 (2.60)	4.70 (2.17)	F = 2.32 ns
場面3 : 他の子が閉めたドアに手をはさむ	5.70 (2.44)	4.90 (2.35)	5.17 (2.85)	5.70 (2.47)	F = 1.06 ns
場面4 : 友だちに押されて机の角にぶつかる	3.74 (1.59)	3.34 (1.80)	4.19 (2.33)	4.93 (2.14)	F = 4.96 **
場面5 : 石を投げられ当たる	3.12 (1.93)	2.78 (1.99)	4.92 (2.75)	3.68 (2.38)	F = 6.65 **
場面6 : ジャンブルジムから自損的に落下	4.12 (2.02)	3.66 (2.00)	5.22 (2.92)	3.05 (1.88)	F = 6.52 **
場面7 : 鼻の穴にビーズを入れる	4.00 (2.64)	2.37 (1.51)	4.64 (2.50)	2.65 (1.97)	F = 9.45 **
場面8 : 走って出会い頭に友だちと衝突	6.64 (2.08)	6.22 (2.16)	6.50 (2.26)	6.38 (2.34)	F = 0.30 ns
場面9 : 階段で滑って転倒	4.24 (2.12)	4.22 (2.06)	4.22 (2.88)	2.88 (1.84)	F = 3.74 *
場面10 : 鉄棒から落下して頭を打つ	3.62 (1.73)	3.71 (1.55)	3.92 (2.41)	2.93 (1.39)	F = 2.27 ns
場面11 : 積み木が崩れて山から落下	4.38 (2.04)	3.29 (1.89)	5.14 (2.86)	4.33 (2.11)	F = 4.52 **
場面12 : 友だちに手を引っ張られ転倒	3.92 (2.04)	2.83 (1.86)	4.64 (2.05)	2.60 (1.50)	F = 10.04 **
場面13 : 小さなおもちゃを耳に入れる	2.64 (1.71)	2.12 (1.50)	3.61 (2.50)	1.85 (1.39)	F = 7.00 **
場面14 : 砂場で砂が目に入る	5.48 (2.46)	5.88 (2.15)	6.83 (2.17)	5.50 (2.09)	F = 3.10 *
場面15 : 画用紙の上で滑って転倒	3.28 (1.79)	3.20 (1.95)	3.92 (2.40)	2.48 (1.28)	F = 3.78 *
場面16 : 雨で濡れた廊下で転倒	5.46 (2.37)	4.90 (2.33)	5.86 (2.46)	5.23 (2.20)	F = 1.15 ns
場面17 : スベリ台の手すりに紐が絡まり首が絞まる	2.72 (1.57)	2.76 (2.05)	3.47 (2.72)	2.85 (2.21)	F = 1.05 ns
場面18 : ブロックの角に頭をぶつける	3.86 (1.84)	3.41 (1.86)	3.08 (2.17)	2.93 (1.44)	F = 2.27 ns
場面19 : ビー玉類を口の中に入れる	6.68 (2.48)	5.63 (2.42)	6.97 (2.29)	6.28 (2.58)	F = 2.24 ns
場面20 : お菓子の中の乾燥剤を食べる	4.94 (2.50)	3.56 (2.00)	5.39 (2.79)	3.30 (2.63)	F = 6.76 **
場面21 : 大人が振り返り子どもにぶつかる	5.34 (2.40)	5.20 (2.09)	5.08 (2.38)	4.35 (1.94)	F = 1.66 ns
場面22 : 食事でジンマシンが発生	4.90 (3.10)	2.27 (1.70)	3.36 (3.40)	2.38 (2.18)	F = 9.53 **
場面23 : 子どもの薬を間違える	3.68 (2.97)	2.00 (1.48)	2.44 (3.14)	1.45 (1.55)	F = 7.03 **
場面24 : 大人が閉めたドアで手をはさむ	5.22 (2.41)	3.29 (2.24)	3.17 (2.75)	2.35 (1.92)	F = 12.43 **

1年50名, 2年41名, 3年36名, 4年40名. 合計167名.

** $p < .01$ (両側), * $p < .05$ (両側), ns : not significant

ると、子どもの危険行為にヒヤリハットする場面であるが、その子どもの年齢は3歳に一番多いと判断する回答が最も多く、3歳とする回答数が全体の38.8%であった。右の数値には、その最頻値の平均値とSDを示した。

24場面についてそれぞれの結果をみると、3歳児と記入した回答が14場面、4歳児とする回答が7場面であった。

前報告(伊東ほか, 2012)と比較して調査結果の安定性について確認する。前報告で現職者に尋ねた調査

によると、かなりの場面について結果の一致が見られた(前報告の表3)。また、最頻値が異なった場面は以下に対照して記すが、これ以外は最頻値の子どもの年齢は一致していた。

場面10：今回は4歳、前報は5歳(次点は4歳)

場面11：今回は4歳、前報は3歳(次点は5歳)

場面16：今回は4歳、前報は3歳(次点は2歳)

場面24：今回は3歳、前報は2歳(次点は3歳)

前報ではヒヤリハット認知を高める教材として何歳用が適切と考えるかという問いであるので、今回の何

表2 ヒヤリハット認知得点に関する学年間の多重比較

場面1	: 2 < <u>1</u> < 3, <u>2</u> < 4	場面13	: <u>2</u> < 3, 3 > 4
場面2	: -	場面14	: <u>1</u> < 3, 3 > 4
場面3	: -	場面15	: 3 > 4
場面4	: <u>1</u> < 4, <u>2</u> < 4	場面16	: -
場面5	: <u>1</u> < 3, <u>2</u> < 3	場面17	: -
場面6	: <u>2</u> < 3, 3 > 4	場面18	: -
場面7	: 1 > 2, 1 > 4, <u>2</u> < 3, 3 > 4	場面19	: -
場面8	: -	場面20	: 1 > 2, 1 > 4, <u>2</u> < 3, 3 > 4
場面9	: 1 > 4, 2 > 4, 3 > 4	場面21	: -
場面10	: -	場面22	: 1 > 2, 1 > 3, 1 > 4
場面11	: <u>2</u> < 3	場面23	: 1 > 2, 1 > 4
場面12	: 1 > 2, 1 > 4, <u>2</u> < 3, 3 > 4	場面24	: 1 > 2, 1 > 3, 1 > 4

チューキーのHSDによる多重比較 すべて $p < .05$, 下線は高学年が大きい

表3 ヒヤリハット認知が起こる年齢

	年齢の最頻値 (%)	平均値 (SD)		年齢の最頻値 (%)	平均値 (SD)
場面1:	3 (38.8%)	3.69 (1.14)	場面13:	2 (49.4)	2.15 (0.96)
場面2:	4 (41.2)	3.83 (0.96)	場面14:	3 (58.8)	3.28 (0.88)
場面3:	3 (45.9)	3.46 (1.00)	場面15:	3 (45.3)	3.46 (0.96)
場面4:	3 (34.7)	3.83 (1.16)	場面16:	4 (37.1)	4.02 (1.32)
場面5:	3 (29.4)	3.82 (1.39)	場面17:	3 (42.9)	3.64 (1.09)
場面6:	4 (38.2)	4.02 (1.08)	場面18:	3 (42.9)	3.02 (1.03)
場面7:	2 (40.0)	2.41 (1.08)	場面19:	1 (42.9)	1.54 (1.00)
場面8:	5 (38.2)	4.71 (1.37)	場面20:	2 (44.1)	2.15 (1.04)
場面9:	3 (37.1)	3.80 (1.42)	場面21:	3 (48.2)	3.16 (1.02)
場面10:	4 (38.8)	4.63 (1.37)	場面22:	3 (35.3)	2.96 (1.29)
場面11:	4 (39.4)	3.75 (1.00)	場面23:	3 (40.6)	3.14 (1.18)
場面12:	3 (53.5)	3.49 (1.04)	場面24:	3 (44.1)	3.07 (1.09)

大学生 167 名

歳に多発する場面かという質問においても、年齢的にかなり対応していると考えられよう。

2. 現職者との比較 (目的2)

2-1. ヒヤリハット認知得点の群差

表4に大学生群(4学年合計)と現職者群の平均値の差を示した。統計的検定の前に数値を概観すると、24場面すべてについて、現職者群よりも大学生群の方が高い傾向がうかがわれた。図版24枚それぞれについてのヒヤリハット認知の群差を調べる事が目的であるので、それぞれに独立2群の平均値の差の検定を行った。結果は表4にあるように15場面に関して有意差が見出された。

有意差の得られない場面をみると、場面1のように平均値が5点台、場面2のように4点台、場面5や場面12のように3点台、場面13や場面23のように2点台と分散していて、特に高い方や低い方に偏る傾向は見られなかった。

2-2. 24 場面全体の合計得点による大学生と現職者の平均値の比較

24場面すべての項目を用いて合成得点を算出した(表5)。クロンバックの信頼性係数は $\alpha = 0.924$ 、その項目を削除した場合の24の α 係数のうちで最も低い数値は $\alpha = 0.915$ であり、数値は満足すべき大きさであった($n = 259$)。

この合計得点を用いた独立2群の平均値の差の検定は有意であり、大学生群の方が現職者群よりもヒヤリハット認知得点の平均値が高かった($t = 4.74$, $df = 257$)。

2-3. 24 場面の合計得点と年齢間の相関

大学生、現職者、大学生と現職者の合計(合併データ)の3通りに関してピアソンの相関係数を算出した。結果を表6に示した。大学生群、現職者群のいずれも有意とならなかったが、合併群では有意となり、経験年数が多くなるに従ってヒヤリハット認知得点が低くなる負の相関関係が得られた。

表4 大学生と現職者の群差

	大学生群	現職者群	t 値
場面 1	5.80 (2.75)	5.51 (2.83)	$t < 1$ ns
場面 2	4.65 (2.35)	4.20 (2.15)	$t = 1.55$ ns
場面 3	5.39 (2.52)	3.93 (2.32)	$t = 4.64$ **
場面 4	4.02 (2.02)	3.51 (1.98)	$t = 2.01$ *
場面 5	3.56 (2.37)	3.01 (2.21)	$t = 1.84$ ns
場面 6	3.99 (2.32)	3.05 (2.07)	$t = 3.27$ **
場面 7	3.41 (2.38)	2.96 (2.20)	$t = 1.53$ ns
場面 8	6.44 (2.19)	4.66 (2.15)	$t = 6.37$ **
場面 9	3.90 (2.29)	2.60 (1.66)	$t = 5.32$ **
場面 10	3.54 (1.81)	2.65 (1.49)	$t = 4.06$ **
場面 11	4.26 (2.29)	3.05 (1.72)	$t = 4.84$ **
場面 12	3.49 (2.03)	3.03 (1.92)	$t = 1.80$ ns
場面 13	2.53 (1.89)	2.47 (2.03)	$t < 1$ ns
場面 14	5.87 (2.28)	4.35 (2.09)	$t = 5.37$ **
場面 15	3.20 (1.92)	2.52 (1.69)	$t = 2.91$ **
場面 16	5.35 (2.34)	4.23 (2.28)	$t = 3.76$ **
場面 17	2.92 (2.13)	2.27 (1.98)	$t = 2.43$ *
場面 18	3.36 (1.86)	3.07 (2.21)	$t = 1.12$ ns
場面 19	6.39 (2.48)	5.43 (3.37)	$t = 2.43$ *
場面 20	4.31 (2.62)	3.26 (3.08)	$t = 2.90$ **
場面 21	5.01 (2.23)	2.74 (1.66)	$t = 9.37$ **
場面 22	3.32 (2.88)	3.09 (3.55)	$t < 1$ ns
場面 23	2.47 (2.55)	2.00 (2.92)	$t = 1.35$ ns
場面 24	3.62 (2.57)	2.29 (2.27)	$t = 4.32$ **

** : $p < .01$ (両側), * : $p < .05$ (両側), ns : not significant $df = 260$, 欠損値のある場面 1, 場面 9, 場面 22, 場面 23 は $df = 259$. 場面 9, 場面 11, 場面 19, 場面 21, 場面 22, 場面 24 は等分散を仮定しない

表5 ヒヤリハット認知 24 場面 (合計) による平均値の比較

群	平均値 (SD)
大学生	4.19 (1.31)
現職者	3.37 (1.39)

大学生群 : 166 名, 現職者群 : 93 名

表6 24 ヒヤリハット認知得点と年齢間の相関係数

大学生群 (n=166)	-.11	ns
現職者群 (n=93)	-.04	ns
合併 (n=259)	-.24	$p < .01$ (両側)

3. まとめ

伊東ほか(2012)では、子どもの危険行動に関して<ヒヤリハット>する場面の図版を作成した。この図版は、事故直前と事故発生の時系列的な2枚の絵を1組とする合計24場面からなっている。本研究の主な目的は、このヒヤリハット場面(2012版)によって測定したリスク場面に対するヒヤリハット認知の得点が、幼児教育志望の大学生の4学年の間でどのように変化するかを調べることであった。ヒヤリハット認知の程度は、事故がどの程度の確率で発生しそうかというヒヤリハットを伴う主観的な確率により定義した。大学生1~4年生167名と現職者95名に対して行った調査から、主に次のような結果が得られた。

(1) 図版ごとにとみると、24場面中の15場面において、大学生の4学年間のヒヤリハット認知の平均値に統計的な学年差が見られた。しかし、学年と共に単調増加あるいは単調減少になった項目は少なく、得点は複雑な変化を示した。

(2) 大学生群の学年要因とヒヤリハット認知得点の間には、統計的に有意な相関関係は見られなかった。

(3) 大学生群は現職者群よりもヒヤリハット認知の平均値が統計的に高かった。

(4) 大学生と現職者の合併データから、ヒヤリハット認知の得点と保育経験年数との間には有意な負の相関がみられた。これは、保育経験年数の上昇と共にヒヤリハット認知の平均値が下降する関係を示した。

以上のことを踏まえて結果を解釈すると、現職者を含む長い期間でみればヒヤリハット認知の得点は低くなっていくが、一方で大学生4年間では高くなったり低くなったり複雑な変化を示すと考えられよう。ただ、この解釈にはいくつかの確認すべき問題が残されている。1つは何らかの理由による学年特有の傾向(コホート)かもしれない。もう1つは2012年版に特有の傾向かもしれない。この点を明らかにするためには、追跡調査を行ったり、別のヒヤリハット場面を作成したりする必要がある。これらは今後の課題として残されている。

保育士のヒヤリハット経験に関する石川ら(2009)の報告では、保育経験年数と保育士自身のヒヤリハット

ト体験数との間には、有意な負の相関関係は見出されなかった。本研究の2012年版を用いたヒヤリハット経験と保育経験年数との間でも同様の結果が得られているので現職者の今回の結果と矛盾はない。ただし、石川ら(2009)の調査では、調査回答の保育士の保育経験年数と、その保育士から見た他の保育士のヒヤリハット場面数の間には、有意な正の相関関係が得られている。また、実習学生のヒヤリハット場面数に対しても同様であった。これらのことから、保育者の保育経験年数はヒヤリハット認知を高めるが、自身のヒヤリハット場面に関しては関わりが見られないことが予想される。すなわちヒヤリハット認知のような危険感受性が高まることと、職能としての事故防止の対処能力の形成とは、別のメカニズムが働いているという可能性がある。ただ、詳細は今後の課題として残されている。

<付記>

調査に回答いただいた現職保育士・幼稚園教諭の皆様と仁愛大学人間生活学部子ども教育学科の1~4年生の皆様にお礼申し上げます。また、本稿をまとめるにあたり日頃よりご助言いただいている西村重稀先生(仁愛大学人間生活学部教授、仁愛大学キャリア支援センター長)、三和優先生(仁愛女子短期大学教授、仁愛女子短期大学附属図書館長)にお礼申し上げます。

引用文献

- ハインリッヒほか(1980) 井上威恭(監) 総合安全工学研究所(訳)(1982) 産業災害防止論 海文堂出版 [Heinrich, H.W., Petersen, D., & Roos, N. (1980) *Industrial accident prevention*. New York: McGraw Hill.]
- 石川昭義・大野木裕明・伊東知之(2009) 保育士のヒヤリハット体験 仁愛大学研究紀要(人間生活学部篇) 創刊号, 39-52.
- 伊東知之・大野木裕明・石川昭義(2012) 保育実習生のヒヤリハット認知を高める教材開発研究 仁愛大学研究紀要(人間生活学部篇) 4, 39-52.
- National Research Council (1989) *Improving risk communication*. Washington D.C.: National Academy Press. [吉川肇子(2000) リスクとつきあう 有斐閣より]
- 大野木裕明・石川昭義・伊東知之(2011) 保育士・幼稚園教諭・

学生による事故防止策の評価－事故場面へのヒヤリハット
認知－ 仁愛大学研究紀要（人間生活学部篇）3, 49-62.

田中哲郎（2006）保育園における危険予知トレーニング－事
故を防ぐ感性を磨くための－ 日本小児医事出版社

田中哲郎（2007）新子どもの事故防止マニュアル（改訂第4
版） 診断と治療社

田中哲郎・石井博子（2003） すぐ役立つ救急ハンドブック
学習研究社（Pp.148-152）